



タイトル番号：0019

書名：八幡蒙古記

1冊



八幡蒙古記上

文永五年二月朔日蒙古國の使奉たる牒状を京都へ  
奉りて可く如返牒ハなく使をとり返さるるを  
牒使等夜々見えくして筑紫北地理和津軍庭足懸  
逃路ホにあるまでこまくり國一又あひ向ふ人けや  
うをも想一所のあれいをもろくもなかりて諸子をも  
りて返りて返さるり此のち多々使をとり又こま  
りゆを京都ふ法社法祈禱あるも富社ある三  
月五日奉幣同十三日十四日淨行社僧四十五人亦  
せて仁王講を行はるす大般若経供養ホとありぬ  
く連、御祈禱<sup>おん</sup>ありに同十一年十月五日卯時ホ

對馬國府八幡宮假殿の内より火焰あひしりくも  
えつり國府立寄の人々焼亡出来しよしとるふとや  
べき物もあると云々怪しみざるほどに同日申時小對  
馬の西おもて佐原浦小舟國船足申其數四五百艘許  
ル九三四萬人とやあんとるはうりよせ奉る  
同日酉時國府の城頭不告即地頭宋馬允資國八十  
餘騎少て同丑時波浦より仲く翌日卯時通人眞繼男  
使者として蒙古人其事の志を尋ぬる処小舟  
くは舟よりいり大船七八艘ありあさち來へり  
しり勢一千人もあんと足申其時宋馬允陣と  
て戦ふいそれつ矢に吾國人數りらに射らるる此中



に大將軍とおぼしき者四人あり毛なる馬にのりて  
一もんふあやむのよ老宗馬許二郎右の乳柱とを  
いりわたりしりあつこの時馬允射倒さる者四  
人宗言先未く戦ふとくをさほひふりてわぬ同子  
息宗子二郎吉子許二郎同八郎親親刑部丞即亦仁三  
郎庄太郎入道源八在廳左近馬允千人肥後國佐原人  
口井藤三原三郎已上十二人同時討死を蒙古佐す  
備の立寄る火をつきて焼拂ふり宗馬允の郎亦小  
右郎兵衛次郎竹多にりりて告知同十四日申時  
よ香岐嶋の西おもてに蒙古の兵船つゝ其中に二艘  
あり四百人ほりりて赤旗をとりて東の方を三

度敵の方を三度奪ひ其時守代平内左衛門尉景隆  
并西平人百餘孫庄三郎の輩少く矢合に蒙古入  
る矢ハ二時をうりし間より護代。方小は二人子  
負異敵ハ大勢なりされとも法以よめり小へくもあ  
らざるにれハ城のうちへ引退て合戦に同十五日小  
攻めとされて城の内少く自害に同十六日十七日平  
戸能古鷹嶋邊の男女多く捕らる松浦黨敗北に同十  
八日平内左衛門下人宗三郎等多へりてきて告志  
らする由にともや蒙古の取ともありつらねて流家  
國今保小をほきおけるはよ。京都へもつる。いふハ  
法祈禱ありて尚社へ金銀、石刀、障を奉じ給ふ

是異國降伏の法祈の為ともは九國まではわけて攻  
奪し。と思ひ。さなり。これハ耳ぬとま。く。り。此蒙  
古軍兵ハ太宰少貳大友紀伊一。お。白。杵。戸。澤。松。浦。黨。前  
池原田大矢野兒以下神社佛寺の司亦にあらまて  
我わくとをせあつす。され。いた。と。ハ。異。敵。十。萬。小。及  
ふとも何れとの事ありんとも。い。さ。ず。く。を。え。ん。に。  
けるその中に太宰少貳三郎左衛門尉景隆殿を以て大  
將軍として行をせける。と。ころ。十月。七日。未。明。より。蒙  
古の一子陸純尔ありあうり馬ふり。は。さ。を。あ。り。て  
攻。り。は。さ。に。前。小。貳。入。道。覺。慧。孫。ら。う。に。十二。三  
なる。矢。合。の。と。め。と。て。小。鐘。を。射。出。し。り。に。蒙。古。一

度にとりや突ひ大敵をく死せしむを折て鬨をほく  
る事ありし日本に馬ともこれおとろきをこ  
りそぬくもよほどに馬をこを刷ひし向もんとす  
る時のおくれなるうちに射うけらるる矢も短  
しとりへとも矢のぬれ毒をぬれられそちともあ  
る處毒氣にすくめて敵より數百人矢を死をそり  
へて雨のぬれいなる向ふへくもあらん捕鉾長柄  
物の具はあき間をさしてそつた一面ふちちを  
んととりもする者あれの中に包て引迷き左右より  
端をすほし合せてとりこめて皆らりける其中不  
よくあるまひ死しるるをば腹をこ死肝をとりてそ

のみもけるととより牛馬の肉取らるる物とほる固  
有りたねハ人の命をすいころさるし言をもとり  
て食とせを鎧わらく馬ふくくのこちうつもく命  
をします豪勢勇猛自在まはすりぬくもくわけ引せ  
り大將の言ま所ふありめて引へきあをい逃散を  
ころ直へさ時あは攻敵をならしそれふえころひて  
あふすへてその引時ふてつあうとて鉄丸も火を包  
て烈しくとはあありてわらし時四方に火炎ほと  
そして煙を以てくすす又其音甚うたねハ心を  
迷りしきも攻敵し目くれ耳ふらうりて東西をい  
はるるころぬるとめに折るし者多うり日本の軍のこ

やう相互に老のり何ひ言名せざんハ一命おより搭  
頭とおひふ不に此合戦は大勢一度おより合て是子  
のほろろと不いれしと取つてお一夥又生  
捕らるるの破おわけ入るるの日本人に一人として  
漏るる者こそあつたれ共中お十松浦業いさみき  
り一破おおゆく打さぬ原田一教澤田おひこもれ  
てうせふたり日田青屋二三百騎をうり少てもいへ  
たり青屋のりたるは口はきくして志おへお敵陣  
を引きよるる人ハハハの手に志はるるふとの  
ともほりしてわけ入るるにむしりと書こあら  
れそのりもくぬく打死主人の死をうりは方の

陣へおりよるる青屋伐きうりとおえられと肥  
後国庄赤人竹崎五郎幸長天草博士大矢野種保兄弟  
船おわけりしはるるもよくもあらすいしれと此おに  
いりてハ侍うりや白石ら通番もえをすん  
うに山田の差者五人茶古にあひさしてこれ赤坂  
をうりてのけ焼おなりて逃るおに茶古三人おぬ  
みともてそおひうけたるされともとくにけ逃り  
一町あまうりあまうりおは茶古ちうりぬくせめてのち  
おや尻をあさあけては方へむらひてをとりける  
はとれ山田の遊政もとも口をしまりぬれ奴原にか  
く追立ちあつるも精きをえいいて射あつへまに

見あつたとも遠矢射て足む南亭八幡大菩薩此矢敵  
亦あてさせ給へとも何れあつともなくはるちける  
小あやすまはらぬ二人ともつらいつ此とき日午  
人ハ一皮にとつとわらへとも系古ハ者もせは子貞  
と極具してわけありつ大菩薩の心骨小あはるは  
可め何しつこれ矢のあつともまじりあれあつとも貴  
ハさる人なくしやハさほつりあうりもまされとも  
系古志ハ心小はるちつちあふ事して攻事今ほ佐宗と  
道赤坂<sup>まか</sup>とてお入して松糸の中に陣を取てをぬい  
りけるあやの事何らハとをぬてハあとはさ  
りたぬも妻子眷属をわくハとあつたハとて數千人を

捕らぬやとるはめど軍立あつてひにまをひて  
今<sup>は</sup>おちてまむくハまやもまらなく<sup>は</sup>造<sup>か</sup>あひしに引  
込て一人もあつともまをなくするれさうに菊  
池次郎あつて切て百孫はうりを二手に分ちたよ  
せてさんしにあつちらハまなり下になり孫貞を  
あつハあめこらうたつら多くこよれおつりつこ  
ハとまも菊池をうりたつちとてされて死人の中  
よりあつちつて死ともあつちとつちて法方杜陣ハ  
入ハとまも菊池をうりたつちとてこれ備ハ大菩薩を深く  
信してとも感賞あるなは願ひたつち一人も人のお  
を子向たてまつらんとの立親なりハ故ありとて後

小太宰府より注進して京都まで届いた。甲冑を尚  
社へお預めゆる少貳入道の子息大將三郎左衛門尉  
景資兵平四郎入道子小太宰左衛門中を姫とて白  
石大矢野中更により合てさん々に戦ふは外差ある  
者死をねとひたるを多く者あつて攻めんと  
も物のうあともせは柔吉ひのやうりに破りて依余  
宮崎までこそ敵を入とられ異國のあやん何由と  
の事あさんとあれつりて妻子老幼を隠しおらけり  
しよとあつてもおひる在り所にあり入ていく  
万人をう奪捕も多人みふ人まほえんぶんとせ  
ん不陸方多くして一人ホ一人のあてはるにあらへ

まあやなといさみまゝに一日の戦ひもあ  
されさわきをいふくはななく軍衣割よりぞどまう  
可日とこれうにありし。あやうこれにさ  
やまゆこそ多くなりにこれ何事あるあんと怪  
みしにあらせん武方及びは中本様お引ことりてさ  
いしておんまんと逃さるべきこそあまんとりこれに  
れをまきくよりあやうやとてわきまにありあゆ  
可多かりこれにあやうあつておれをいふて  
今一人も我えんとおれ小若きたえにさるさうに  
大將小貳景資兵平の大將とおけりして長七人を  
り此大男ひけし跡邊までおれさうりたるうあやう



みありもなるまふのこ十四五騎うちつきて徳人土  
八十人あひ具してたひわくるその時景徳の旗のせ  
みくちを移りしりしりハ八幡大菩薩の法教向とた  
のどしく思ひ究竟の馬廻りの上のありしりハ  
それ小下知してた物此上馬にのせ一鞭うちてをせ  
出させしりあ奴多をえりてまてまつひまをぬら  
矢一もんあぬまも大男の直中を射つぬま逆ハ  
こそありしりたれつきまひしり所等ともこれ小お  
とりま推へ入る路きもを景徳水本城の方へ引る  
へたその時甲あり毛馬小金作のくちむまを馳出  
しり異敵をあひしり捕へしり此者もこの大男のま

と尋ぬぬハ景徳一方の大將佐將公と云このなりと  
そ又其者しりしりハ知しりしりありしりハ知しりしり  
既ハ昔ハ大將軍をうちてしりしりまも八幡文  
の降伏せしりしりたふとまをたて皆人あしりしり  
みくちとて水本城しりしりハ水田少て道一あり  
あるのみしりしりハ野原しりしりまも水本おほし  
ゆた。なり馬蹄飯坊しり兵糧潤澤しり左右山あひ  
三十餘町をまてしりしりたまもまもしりしり  
戸口もを盤石門をまてしり今ハ礎石はしりしり  
しり南山近くあひしり川ありしり右山の橋も  
深くしりしり城をまてしり二三里廻りしりしり

への信代に異賊を少せうんよめに帥の大將をお  
うれとる大將柳なりなりは申しき古澤なりと  
ねともあまの軍勢と一日の戦ふきへうめて博  
多管崎をうちきて、あち入なれは末はひる。よあり  
伸くもの可きあやの越山うつまて位すといふれ  
しちあをそなうりけるは。のるもきまいのちと  
て妻子を引具し老幼を杖けしつちとあきあき  
ぬる中存の旗を迷ふとわくやとんるふへも哭  
する人となうりなれ管崎の留主をばしめし  
て僧俗社官固め居りしをたのむ所の軍兵の  
皆あらしめしるへわくてもいし有へきたといふ

ハ遁れたりとも神體をまきあき奉り今忽ち異賊ホ  
に穢させたりし人すこをわくこくわくとな  
なれりのちあきんわきりしはくまては信じてい  
つまきんとなしをまきしつあまう火急の事  
なれば神樂小町のせとてまつしきこを恐くな  
しこれ信代まよハ留主左衛門尉定重平左衛門尉景  
親同景康同書允定秀以下の社官とも少く集り  
うみまへとしてしを記しころに彼言ふはやくお  
ちほく一人もなれをわく閉ていれとてまつ  
るしあやもあきなれんきくなくと上山極楽  
寺少といれたりしをりあしる雨小涙あらし